

「地球時代のエコ技術・都市・ライフスタイル」

“ECO-SOUND SOCIETY UNDER THE GLOBAL CRISIS”

内藤正明

Masaaki Naito

1. 地球問題とは何か

地球環境問題の一般的な紹介は既に数多くなされているので、ここで改めて繰り返すことは避けるが、因果の全体構造図から読みとれる重要な地球環境問題の特性は、

- ①互いに複雑に絡み合い、多くの場合状況を加速しあっていること、
- ②原因をたどれば工業先進国の経済活動と途上国の人口増に行き着くが、このことは、単なる対症療法では事態の解決が困難であること、
- ③多くの事象の中でも、主に工業先進国の経済活動全体に由来する「温暖化」と主に途上国の人口増そのものからもたらされる「生態系の崩壊（熱帯林破壊、砂漠化）」は、最も深刻かつ対処困難な課題と思われること、④以上の地球環境問題は公害問題などちがって、直接人間の五感でとらえられず、現在も当分先も数学モデルに基づく「科学的仮説」であること、

であろう。さらにこれらの地球環境問題は、“資源・エネルギー枯渇、南北問題、貧困、食糧危機”などと深く関わり合い、持続的発展はおろか人類生存さえも危うくしている。それら諸現象をここでは「地球問題」と総称する。ところで、その危機がどの程度のものかについての予測には相当の幅があるが、そのおよその様子を多くの専門家の見解をもとに描いてみると図-1のようになる。これから言えるのは、21世紀もかなり前半に危機的状況が次々に生じるだろうということである。

2. 地球環境問題の本質

環境問題とは経済、技術、生活のツケとして生じたものである。一般にツケを残さない（経済学でいう「外部化」することなしに）発展とか前進はあり得ないのはエントロピー論の教えるところである。つまりシステム境界の外部に「反作用（マイナス）」を出してはじめて、内部の「作用（プラス）」が生じる。そしてツケの境界を次々に外側へ広げて、ついに限界にまで至ったのが地球環境問題である。

このような状況を図-2に示すが、これは経済的豊かさの副作用（ツケ）としてまず現れたのが、身近な環境の悪化であり、それを克服する過程で多くの場合はさらにそのツケを地球環境に回したということを模式的に表現している。

地球環境問題の本質はこの様な現象の特殊性だけにあるのではなく、その影響を受ける対象にもある。つまり被影響者は少なくともこれを論じている現世代の我々ではなく、その議論に参加することが不可能な“将来世代、他生物、途上国の人々”であるということにある。（図-3）

さらにこのような世界スケールでの問題と並行するように、地域社会の諸々の病理現象たとえば“都市公害、農山村環境の破壊、コミュニティ崩壊、構造不況、過疎と一極集中、社会の価値観や労働観、自然観、そしてこどもの心の歪み”など（以下「地域問題」と総称）が我が国はもちろん他の多くの国々でもその深刻さを増している。そして、これらも結局世界スケールの問題とほぼ同根で、しかもそれと連動している。

この様な世界と国内の両スケールでの社会の行き詰まり、ないしは危機的状況というものが、今新たな社会への変革を求める背景である。

3. 地球問題の背景と対応の困難さ

これまで身の回りの環境問題に比べても、地球環境問題への対応が困難なのは、その背景が単に個別技術が不完全であるとか、誤りといった次元から、技術文明そのものの誤謬、更にはこの文明を支えた哲学、思想の問題にまで遡らねばならないかもしれないところにある。地球問題を論ずる場合、各人の視点がどこにあるかによって主張される対応策は大きく異なる。もし個別の技術に原因があると考える人は、その技術の改善で問題を克服することを提言する。しかし、もし社会や思想にありとする人はそこにまで立ち返った変革を主張する。そのような背景とその深さによって、3つのレベルにまとめたものを図-4に示す。これらの内、「戦後史」と「文明史」のスケールの背景と、それがわが国の地球環境問題への対応を後ろ向きのものにして原因を略述すると、以下のように表現できるだろう。

「戦後の経済発展の歴史」……戦後の完全な荒廃の中で、生きるための経済再建は至上命令であった。そこで戦後の社会はそのあらゆる仕組みが、経済発展にとって最も効率的であるように形成されていった。それは規格大量生産・大量輸出であり、工業技術重視、人・物・金の中央集中などである。これがわが国において著しい効果を挙げたが、その行き過ぎが今日の諸問題の発生の主因でもある。わが国の体制が未だに効率的経済発展を遂行するためのものであり、また各界を牛耳るのが、この発展を支えた人々であることは、新たなパラダイムへの変換にとっては難しい状況と言わざるを得ない。

「古代からの宗教・文化の歴史」……地球環境問題が“科学的仮説”である以上、この抽象的体系を前提として行動しなければならない。しかし、わが国はその宗教・文化の歴史から、仮説体系としての哲学・原理に基づいて規範的に行動することには不慣れである。この点が今地球問題の対応でヨーロッパ諸国に遅れをとっている一因と思われる。例えばヨーロッパで実施されている「炭素税」や「資源循環法」等も日本では実現しそうにない。

このような状況を克服して、適切な行動に移るにはどんな課題があり、そして結局どんな社会像を最終的に描くべきかを以下に検討してみよう。

4. 対応の現状と問題点

以上のような状況に対して、世界的にもまた国内的にも様々な動きが見られ始めたのは事実である。国レベルの大きな動きは「環境基本法」の成立であるが、その基本理念は次の3対のキーワードで要約できるだろう。

- ①「国民の生活」対「人類の福祉」（第1条）→“自国のツケを他国へ回さない”
- ②「環境恵沢の享受」対「恵沢の継承」（第3, 4条）→“現世代のツケを将来世代に回さない”
- ③「自然との触れ合い」対「生物多様性、種の保存」（第14条）→“人間のツケを他生物に回さない”

これらはまさに図-2、図-3で示したことと同じことを意味しており、これから示唆される新たな社会は、「自らの生活や豊かさは保持しつつも、①省エネ・省資源的であり、②生物生存を尊重し、③将来世代への持続につとめ、④世界問題の危機に対処する」ものでなければならない。ただし問題は、そのバランスをどこにとり、他者への配慮努力がどれ程でなければならないか……である。

これを決めるのはまさに「環境倫理」の問題であり、“世代間倫理”、“生き物倫理”そして“南北倫理”としていま大きな話題になっている。その要点を図-5, 6に示す。この図で示した「環境倫理」の意義とはあくまでも、これら三つの視点を改めて認識することの必要性であり、その結果は必ずしも環境至上主義を意味するわけではない。この三つの側面それぞれに図に示した「人間尊重主義」と「環境尊重主義」の対立的主義のどのあたりを選ぶのかという根拠は、人とは何か、自然とは何かという「自然の摂理」に関する

る哲学・宗教など形而上の理念から導かれるものである。尚、「人間尊重主義」とは自己実現を第一に考える近代文明社会の中心的価値基準に立つものであり、一方「環境尊重主義」とは、今日の地球危機を背景にして強く言われ始めた、自己実現以前に他者への配慮を重視する立場に立つものである。

これについては欧米を中心に議論の長い歴史があるが、日本では馴染みが薄い。倫理という言葉にさえ拒否反応を示す自然科学万能または実利万能者がわが国には多いようだが、この命題に関する限りそのいづれもが答えを与えることは出来ない。ただし、哲学が外的規範として社会を規定するのか、実社会の後付として構築されるかは議論のあるところだが、多分そのいずれもありうるだろう。その意味では今地球環境問題をはじめとする社会の危機的状況という現実から、逆にこれを克服しうる哲学が形成されるべきなのかもしれない。

一方、「アジェンダ21」は世界的なアクションの一つであり、これに準拠したわが国の「行動計画」は、“都市・地域構造、エネルギー・産業構造、ライフスタイルなど”まさに今の社会の仕組みの全てを地球負荷（特にCO₂排出、したがって化石燃料消費）の少ないものに変革することを謳っている。この場合にも、最大の問題は“どれぐらいCO₂を少なくすべきか”の量的な目標である。多くの提案はこの前提が異なるために噛み合わない。そこで、これを具体的に3つのレベルに設定したのが図-7である。

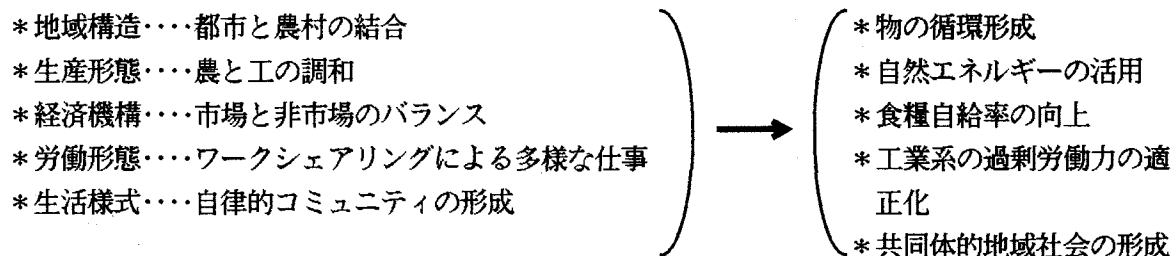
このような3つのレベルの中でどれを目指すかは、先述の倫理と地球問題の科学的予測の両方から決まってくるはずである。

ただし、現在の気候変動予測では、レベル-1の対応ではほとんど意味がないことから、将来の世界の人口増や途上国の経済発展を考慮すれば、持続的社会はレベル-3を目指して努力すべきであるというのが筆者の立場である。

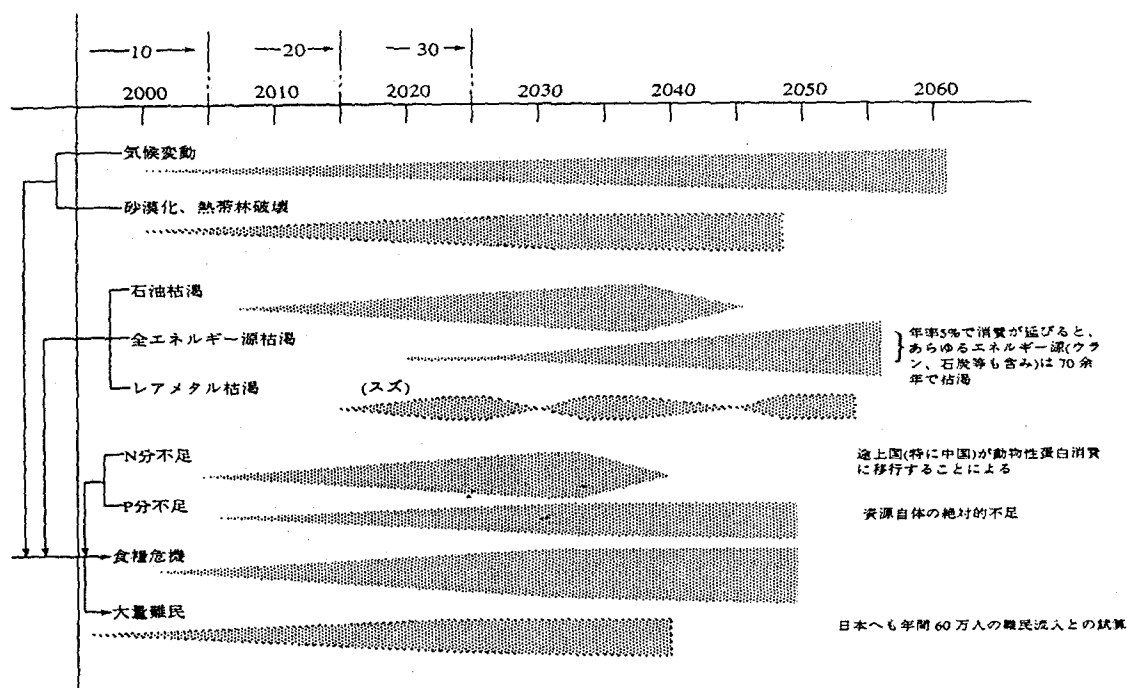
5. 将来シナリオとあるべき社会像

レベル-2から3を目指すとしたとき、あり得る将来シナリオとしては大きく異なる次の3つが想定されるように思われる。一つは革新的な技術、例えば核融合やソーラーセルなどの実用化によって一気にすべての問題を解決しようとする「技術シナリオ」である。もう一つは、これまでの社会のあり方を大きく変えて、いわば地球にやさしい社会を再構築する「社会変革シナリオ」である。そしてもう一つは、この様な努力が成功しなかった場合に想定される「成り行きシナリオ」である。筆者は「社会変革シナリオ」を提唱する者であるが、このいずれのケースにおいてもライフスタイルの変革と同時に、これを支える技術、都市、生産、法・経済システムなどの、いわばハード、ソフト、ハートウェア(!)までもがトータルセットとして変わらざるを得ない。

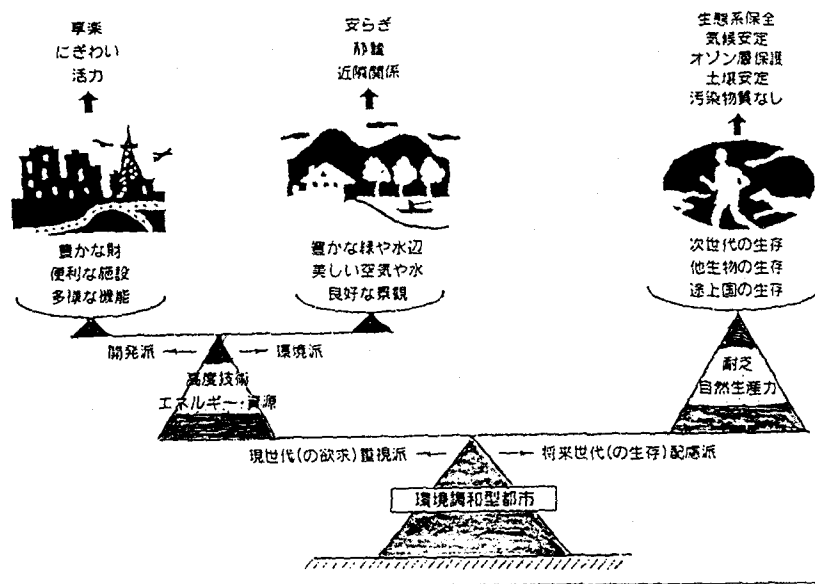
これら3つのシナリオを要約したものを図-8に示す。尚、これらそれぞれの中身の説明は紙数の都合で割愛するが、筆者が望ましいと考える「社会変革シナリオ」についてののみ、その本質的な部分を誤解を恐れずあえて箇条書きにすると、



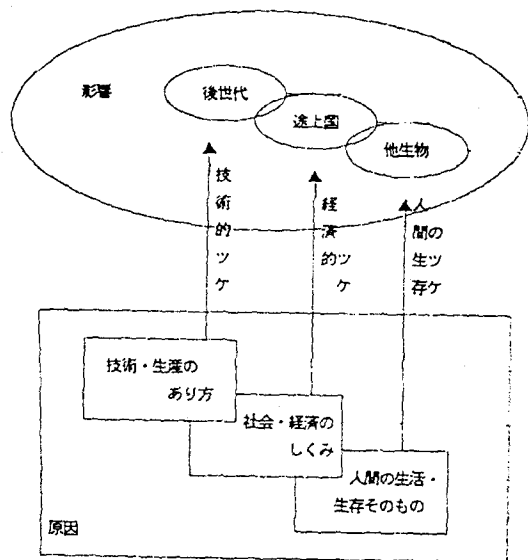
害、農山村環境の破壊、コミュニティ崩壊、構造不況、過疎と一極集中、社会の価値観や労働観、自然観、そしてこどもの心の歪み”など（以下「地域問題」と総称）が我が国はもちろん他の多くの国々でもその深などである。これについては拙著も含み、多くの提言がなされているので、その背景と意義についてもまた別報に譲る。



第1図 世界問題の危機予測



第2図 地球環境問題の位置づけ



第3図 環境問題の原因と課題

文明史

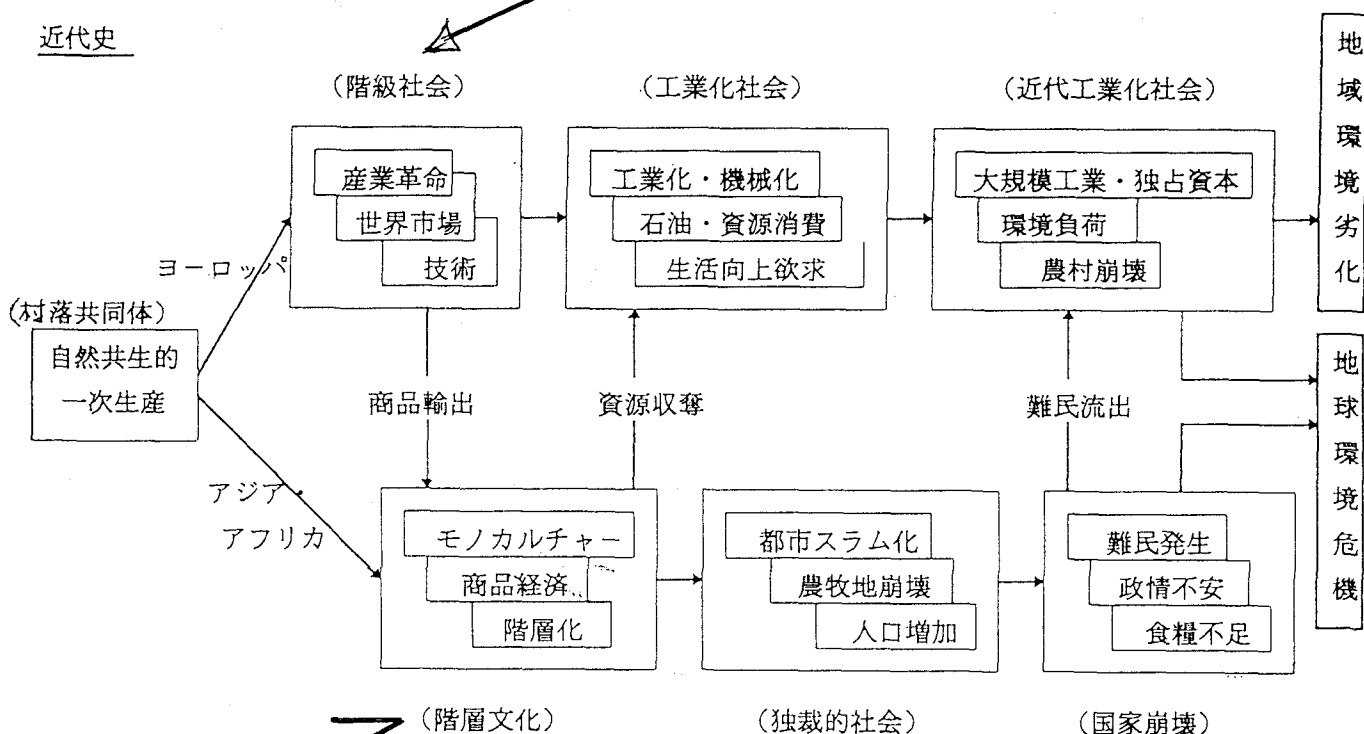
[東欧]

ユダヤ・キリスト教 ——— デカルト・ヘーゲル
二元論 科学万能 ——— 技術中心・自然収奪社会

[アジア・
アフリカ]

アニミズム ——— 原始共同体 ——— 自然共生的社会 ———→

近代史



我が国現代史

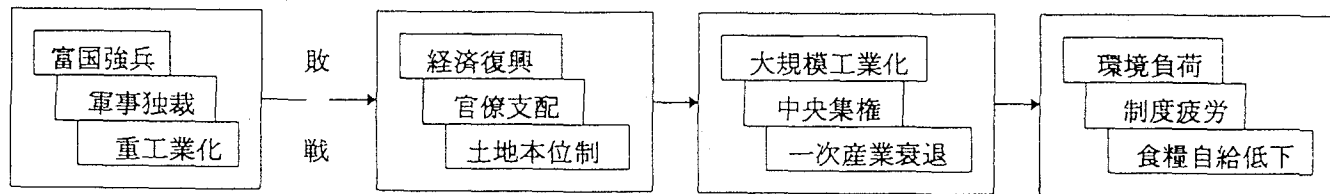
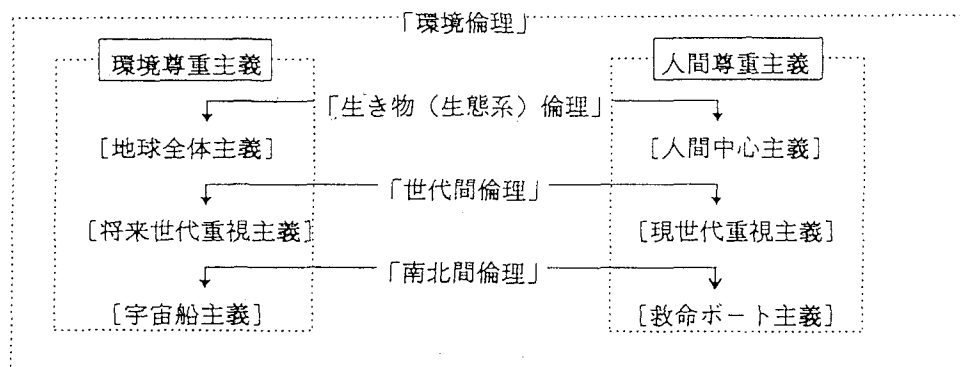
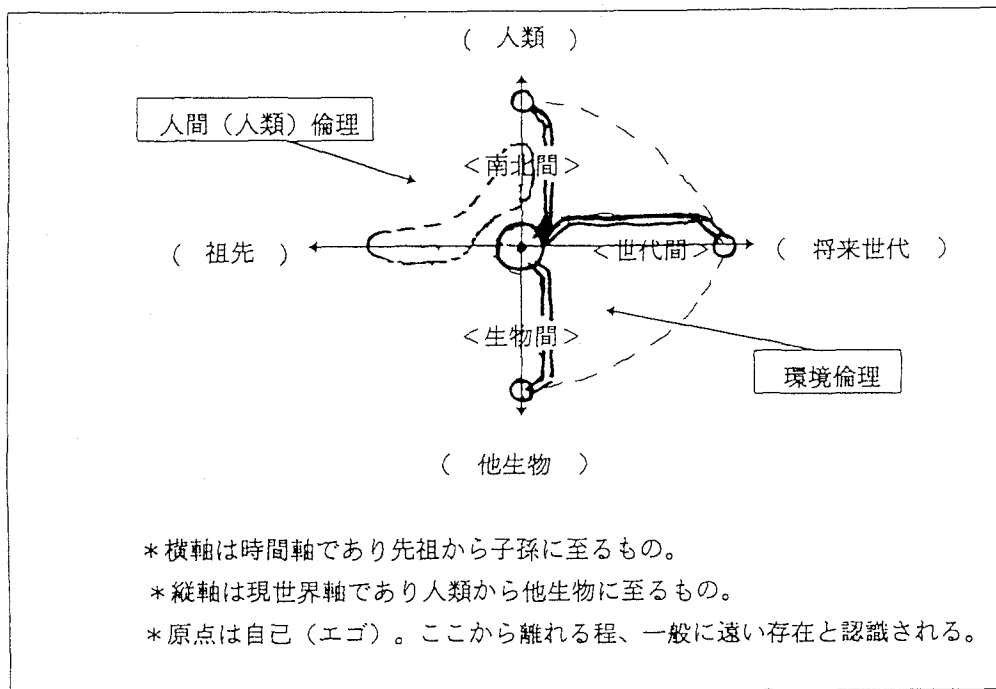


図-4 歴史的背景を論ずる3つのスケール



< 図 - 5 > 環境倫理の三つの側面とそれぞれに関する対極的立場

<図-6>環境倫理の三つの側面とそれぞれの対極的主義

・ 「生き物（生態系）倫理」

- └ [地球全体主義]…… 我々人間も含めた地球上のすべての生き物の存在を意識し、同じ生態系に属して生きるものとして運命共同体的関係であるとする
- └ [人間中心主義]…… 動物も植物も含めた地球上に存在するすべての自然（生き物）の中で人間の存在を最優先に考える

・ 「世代間倫理」

- └ [将来世代重視主義]…… 生の営みを持続的なものと考えて将来世代（子々孫々）への割引率を考慮に入れる
- └ [現世代重視主義]…… 生の営みを断続的なものと考えて自分達が生きている現在を重視する

・ 「南北間倫理」

- └ [宇宙船主義]…… パートナースhipに基づいて、相手国（途上国）の主権をおかすことなく自助努力を促す形で南北格差を縮め、共に生きていく
- └ [救命ボート主義]…… 自国の国内問題を最優先課題として他の国々（途上国）との関係はあくまでも副次的なものとする

・ 「社会制度」

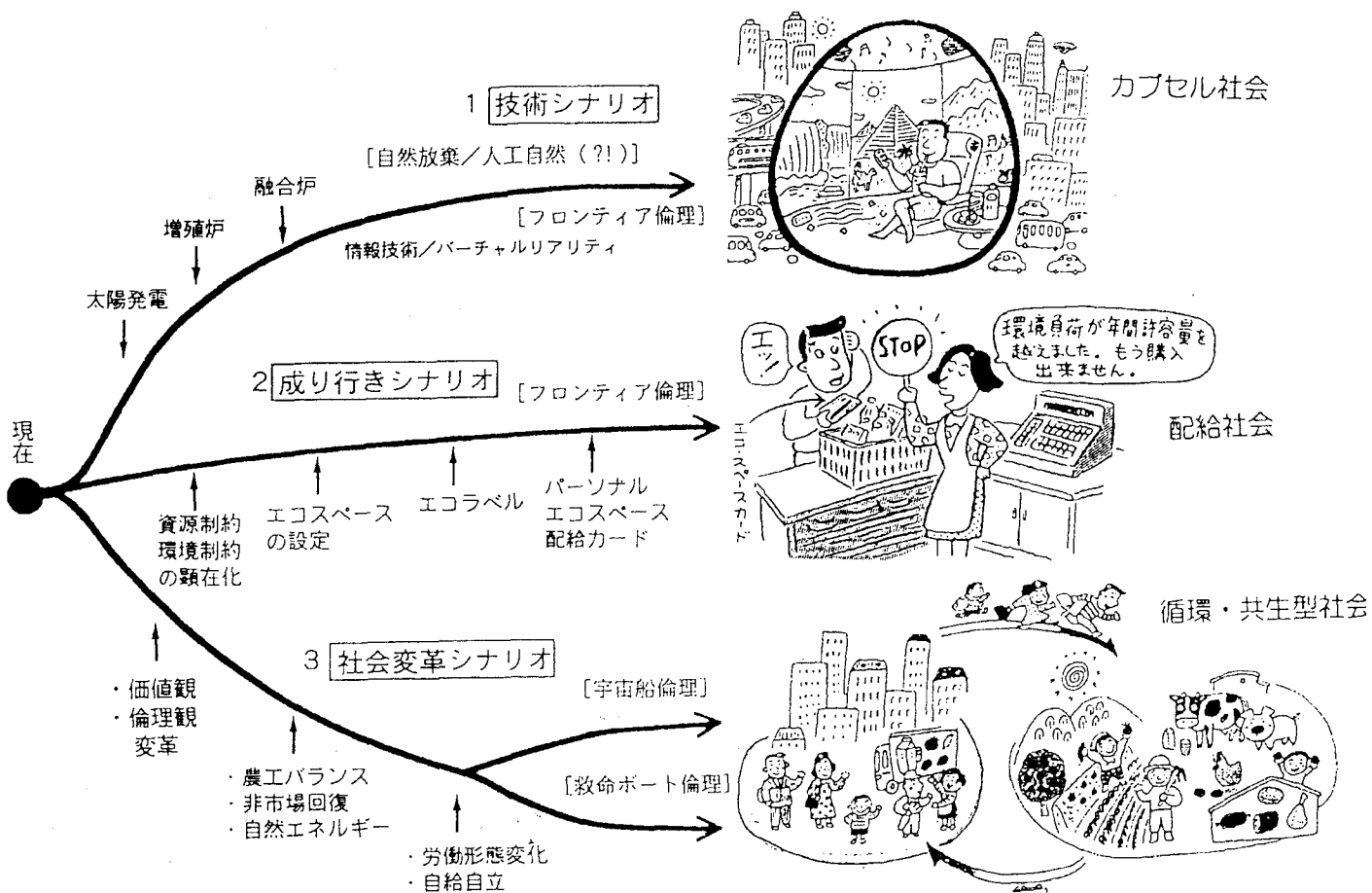
- └ [エコサイクル（範囲・質の）経済]…… 経済は本来自然環境を前提として成立する物質循環に属するもので、本質的には経済的であること＝生態的（エコロジカル）であることとして、エコシステム自体の自動均衡的な力を強める（自立・自給）ような経済構造を目指す（例えば有機産業を中心とする物質循環のclosed system化）
- └ [自由（規模・量の）経済]…… 従来の経済理論のまま[神の見えざる手]に市場の行方をゆだね（相互依存）量産、効率化のための技術革新を続けて経済の巨大化を図っていく

・ 「ライフスタイル」

- └ [エコライフ]…… 少量消費（自然本来の恵みを享受する形での消費）・少量廃棄（有機的循環システムへの還元）
- └ [マテリアルライフ]…… 大量消費（市場の巨大化）・大量廃棄（使い捨て）

社会変化	環境危機予測	技術に対する要求レベル	技術改変方式
世界シナリオ1	社会変化はこれまでのトレンドでのびるが、地球問題などはそれほど危機的とはみない	地球負荷を現状以上に増やさない レベル1: 「排出安定」 (≒化石エネルギー消費非増加)	既存技術の効率改善と実用間近のいくつかの技術を適用 ケース1 「漸進的改変」 (incremental change)
世界シナリオ2	社会変化(人口・経済等)も加味したうえで、地球温暖化を進行させない (IPCC予測に立脚)	地球変動をこれ以上は進行させない レベル2: 「状態安定」 (≒化石エネルギー消費半減)	原理そのものの变化もふくむ新たな技術体系への移行 ケース2 「飛躍的改変」 (transformative change)
世界シナリオ3	社会変化(人口や途上国経済の大幅増)による地球危機の深刻化、資源枯渇の顕在化を強く認識	枯渇性資源・エネルギー消費と地球負荷をゼロに近づける レベル3: 「完全循環」 (≒資源・化石エネルギー消費、ほぼゼロ)	自然エネルギーと物の完全循環による従来と異なる新たな技術システムの構築 ケース3 「革命的改変」 (revolutionary change)

第7図 将来変化に対する三つのケースの設定



第8図 三種類の将来シナリオと想定される社会像